

はじめに

今回の企画展『戦没学生たちの軌跡』では、アジア・太平洋戦争期の戦没学生のなかから、比較的多くの手記が当館に所蔵されている佐々木八郎・松岡欣平・原亮・宇田川達・田村正をとりあげました。五名のあいだの配列は、学生時代の日記が多い者を前に、戦場の日記が多い者をうしろにいたしました。

昨年の企画展と同様の視点ですが、遺稿の許すかぎり、各人の軍隊体験を再現するとともに、とくに一人一人の思想・心情の歩みを読みとれるように意を用いました。

時代の空気が重くのしかかっているのはもちろんですが、同じ戦没学生の遺稿のなかに矛盾・相剋や時を追っての変化が見られるとしても、むしろ当然かもしれません。

以下の展示から何を汲みとることができるか、ご一緒に考えてみたいと思います。

2012年10月 わだつみのこえ記念館

凡例

本冊子は2012年10月10日～11月23日の会期により、わだつみのこえ記念館で開かれる、第2回企画展「戦没学生たちの軌跡」の資料集である。企画展の展示史料の翻刻や解説、戦没学生の履歴などを収録した。

「はじめに」は高橋武智館長が執筆し、短歌の選択などは渡辺総子が担当した。それ以外の史料の選択・翻刻、解説、戦没学生履歴などは山辺昌彦等2名の学芸員が担当した。本企画展は昨年の企画展に続き、記念館所蔵の戦没学生の遺稿を読んできた成果を公表するものである。各解説や翻刻などは企画展実行委員会において検討したので、最終責任は実行委員会にある。

翻刻に際して、縦書きのものも横書きにした。漢字は常用字体に置き換えた。仮名遣いは変えていない。「ㇿ」など、変体仮名の一部は通常の仮名に置き換えたものがある。二字分の繰り返し記号は、「/ \」で表した。カタカナはひらがなに直した。改行は「/」で示した。中略は「…」で示した。脱字を本文中に〔〕で補ったものがある。読みにくい文字に、ひらがなで「ふりがな」をふったものがある。なお、カタカナによる「フリガナ」は原文にある「フリガナ」である。誤字と思われるものには、〔〕の中に正字を補ったり、〔マ〕を付けたものがある。解読で推定したが疑問が残るものには、〔か〕を付けた。

参考文献

原亮『あらむ日日のために』原喜久江、1983年刊

「遺稿・遺品を訪ねて(1)佐々木泰三氏(八郎氏令弟)会見記」『わだつみのこえ』113号所収、2000年刊

「遺稿・遺品を訪ねて(その5)松岡欣平氏ご遺族に聴く」『わだつみのこえ』117号所収、2002年刊

「遺稿・遺品を訪ねて(その6)宇田川達氏令夫人 柿沼邦子さんに聴く」『わだつみのこえ』118号所収、2003年刊

田村正「遺稿 ニューギニア日誌記」『わだつみのこえ』121号所収、2004年刊

さ さ き はちろう
佐々木 八郎

履歴

1922年（大正11）7月7日生。

兵庫県出身。

34年（昭和9）4月、東京府立第八中学校入学。

39年4月、第一高等学校入学。旅行部に入り、
旅行部部屋で寮生活をはじめ。

40年7月、黒部溪谷で墜落し、重傷を負う。

40年9月、旅行部部屋から文二組選部屋へ移る。

41年、寄宿寮の食事部委員をつとめる。

42年4月、東京帝国大学経済学部入学。

43年、古典派経済学の貨幣論に関するレポート
を執筆。また、大塚久雄の指導を受ける。

43年12月、学徒出陣により横須賀の海軍武山
海兵団に入団。

44年1月、飛行専修予備学生（第14期）に採用され、土浦海軍航空隊に配属。

44年5月、谷田部海軍航空隊に配属。

45年4月14日、沖縄海上で昭和特攻隊員として戦死。

享年22歳。



解説

佐々木八郎が残した日記からは、高校時代と大学時代を通じて、相当程度一貫した問題意識をもっていたことが分かります。それを一言でいえば、集団や組織において、人間はいかにあるべきかというものでした。佐々木は個々人が自由であることを前提としていましたが、その自由をふまえつつ、集団としてのまとまりを保っていく方策に思い悩みます。佐々木にとって、個人の自己利益を優先させる利己主義も、集団の利益を優先させる利他主義もともに十分な解答を与えるものではなく、それに代わるものを探求していきます。

高校時代の佐々木は、旅行部の運営や寮の自治といった具体的な問題にとりくむなかで考察を深めてゆき、個人の自由と集団における役割の遂行とを両立させるものとして、「愛」が見出されました。それは、集団から区別された自己利益を追求するのでも、自己の意志に反して集団への献身を強要されるのでもなく、みずからの自由な意志によって集団のためにつとめを果たすという精神的態度を意味しています。

大学時代の経済学研究や、自分自身の出陣に対する態度も、こうした高校時代以来の問題関心に導かれています。その結果佐々木は、理想的な人間のあり方や集団と個人の関係をめざしてゆくこととなります。現在の行きづまった資本主義という仕組みを克服して、「新しい社会」や「新しいエトス」を実現するという現状変革の主張を佐々木が行うようになったのは、このような事情を背景としていました。それは、昨年企画展で紹介した、資本主義的・自由主義的な現状維持勢力とも、復古的な日本主義とも対立する、「合理的」

な体制革新を主張する潮流と問題意識を共有していたように思われます。

こうした志向は、最終的に、当時日本が行っていた戦争に積極的に参与するという帰結をもたらしました。佐々木は、兵士になることを、日本という国家の一員の責務として引き受けようと考えます。そこでは同時に、戦争を通じて日本社会を変革するという意図も抱かれていました。佐々木は、自己の選択を、世界史の進展の方向に沿っているという意味で、「正しきもの」の実現のために戦うことだとも捉えていたのです。その結果として、佐々木と、彼が「資本主義的」「個人主義的」とみなした父親との葛藤は、「新しい社会」と資本主義社会をそれぞれ支える新旧のエトス（倫理）の間の対立として意識され、深刻化することになりました。

軍隊時代の佐々木については、『八郎詩集』から短歌を紹介しました。

史料

1. 高校時代

・旅行部

今日は南 23〔一般部屋〕へ移ってからはや四日になる。北 27〔旅行部部屋〕を出るまでの経過は大内〔力〕へも書いて送ったし、北 27 へも残して来た。要するに、僕の山に対する気持が風来坊、wanderer に毛の生えた位のものに過ぎないといふ事をしみじみと悟って形式的な、煩雑な“部”には適さぬといふ事と、北 27 の低調さ、権力への追従に堪らない反感を覚えたことに基因する。勿論部を出たからとて山をやめるといふのではない。

佐々木八郎『日記 I』1940年9月22日

出て井田と会い、銀座を歩き^{なが}乍ら早大山岳部の現状を聞く。…彼も退部する二年生を卑怯といひ、数年後の早大山岳部の改造を目指してゐる。公益優先、滅私奉公が妙な所に使はれてゐるのに驚く。僕はそんな単純な全体主義が日本の其だとは思はない。個人の意慾其自身が全体の目的に一致する。全体と個の一致が職域奉公なのだと思ふ。其でなければ人間として永続的な努力が続けられる筈もなければ、さういふ不愉快な、不純な状態では完全な活動に迄到達出来ず、強引な練習には相当の犠牲者を出すこととならう。部員が真に一致して心からの情熱を以て精進すれば成果は更に上るであらうし、上らなくとも、人間的に尊いものであると思ふ。

佐々木八郎『日記 I』1940年12月12日

僕はオリンピック映画等に現はれる sports の美と力をよく知ってゐる。一高の運動部生活の尊さをよく知ってゐる。其は個人の生活が社会的自我の活動を通じて全体の為の生活に渾然一致してゐる所にある。僕はさう思ふ。彼等は何も己れの名を、利を求めて活動するのではない。己が長所を発揮して、己が道の上に立上がつて、其の道を、同時に全体の為の道として進む事が出来るのだ。其の努力は己が為ではない。自己が主体たる社会の為の努力であつて、而も自己は^か斯く自己を犠牲にする事を全く自己の個人的自我を顧みない事を何とも思はないで^{かか}られるのだ。斯る道は誰にも備はつてゐる事と思ふ。…さうして僕の去年の上半期の半ば無意識の中の努力を思ひ出す。あの道は僕の道ではなかつた。あ

の道に自分を捨てることは遂に出来なかった。其は残念だ。然し、自己が偶然か必然かは知らねども一年間を過したあの部に責任として、全力を不本意乍らも尽したことに限りない喜を感じる。

佐々木八郎『日記 I』1941年1月5日

・寮の自治

“自治”なるものについて抽象論ならいくらでも述べられよう。然し今の自治は単に形式のみが残ってゐて、其の自治なる所以を示すのは単に学校より直接の命令の来ない所、それ丈だ。其の他は其に附随した事務であつて、其は其なりに、意味なしとはしないが、今の自治が全寮生の関心を集めたものでない事は残念だ。此は北 27 の悩と同様だらう。

佐々木八郎『日記 I』1941年9月27日

寮の自治 其は如何なる意味を有するのだらうか。先づ第一には我々寮生の生活に信頼を置かせ、我々が我々の行動に責任を持つ事。其の“責任”此が我々にとって尊いものなのだ。責任を負ふには資格が要る。此の寮の生活に於る責任によって我々は辛うじて我々の polis 的性格を發揮し得る。我々の時代には此が非常に欠けてゐるのだ。責任を負はせられた時は我々は勇氣百倍するものなのだ。然し、其の責任たるや、自らが有意義也なりと信ずるものに非ずしては勇氣百倍どころか、反つて其の煩雜いとを厭ひ、義務感情に支配されて厭や〜な乍らといふことになって来る。

佐々木八郎『日記 I』1940年11月7日

・愛

一学期：僕には未だ個人と社会が分離してゐた。自分が個人として生きる事は知つてゐた。さうして人間は孤独ではない社会の中にある事を知つてゐた。然し其の社会への奉仕が僕には全然義務だったのだ。意慾と矛盾してゐたのだ。…丁度一学期は旅行部の陣痛カだった。僕は部員の誰よりも外から見ては積極的に働いた。然し其は何度か平澤に訴へた様に単なる義務感情だった。内の矛盾はひどかった。不自然な行為だった。…すべてに自分の理想と現実が分裂してゐた Epoche [時期] だった。／二学期：夏山で重傷した。bed で反省して見た。…まあ alteruism [altruism 利他主義] だ。そんな風なやり方だった。熱心に信じたことを行はんとした。然し心の中はやはり不満だった。第一不純なものがあった。今考へて見ると、個人と社会は未だ分裂のまゝで stress [強調] の位置が代つただけの話だ。…／三学期：2601 年を迎へて今までの僕の面白くない生活の底にあつた唯一の美しいもの、真なるもの、を見出した。其が愛だ。愛するものの為をはかることによってのみ我々は密接に社会との連関を保ち得る。抽象的な社会性、個人性を脱し得る。其が判つた。…人ばかりでなく、学問をも仕事をも愛する事によって弁証法的に統一された完全な行為をなし得る。さうしてすべては愛の為だ。かう考へる様になった。

佐々木八郎『日記 I』1941年3月8日

——抽象的な einseitig [一面的] なものに動かされて生きる時は人は決して満足しない。例へば egoism [利己主義] には所謂良心が咎め alteruism [altruism] には同じく自由感情

が不快を感ずる。全人格と具体的な人間そのものを投げ出して“かうせずにはゐられない。”といふ行為をする時、その時こそ人は自由である。其が愛であり、美的観照である。必然即自由を味はふ時にのみ人は真に人間である。

佐々木八郎『日記 I』1941年3月12日

義務否認論 *Moralität* の道徳は自分以外の主体への阿諛^{あゆ}である。義務といひ責任といふのは他への阿諛である。国家への奉公、社会への奉仕。それは責任としてなさるべきものではない。意志の直感の趣くまゝに生命を傾倒して行へるものは責任ではない。国家に対する忠節は義務ではない。人が其を欲するのでなければならぬ。自分の命と国家の生命とが一となる時は国家の為に喜んで死ぬ事も出来ると思ふ。責任として生命を投げ出す事は満足ではない *Freude* [歓喜] ではない。我々が真に国家を愛する時 其は *Freude* である。…愛するが故に歓喜に胸を躍らせつゝ、愛して、愛する対象を生かさんとする努力は幸福である。…義務といひ、責任といひ、自分が欲しない行為を行ふ事は自己を離れる事である。神を離れる事である。従つてその行為にあつては人は完全に社会から遊離した個人である。孤独である。抽象的な個人としてのもので具体的な生命ではない。

佐々木八郎『日記 I』1941年3月16日

・理性

“バルカン電撃戦”が続いて映写される。フュア・アイン・マン [für eine Mann 一人の男のためにカ] の感じ強し。仏革命後のナポレオンの役割を、ソ聯革命の後に演ずるヒットラー。無智なるが故に引づられる幾千万の人達。人間精神は何処にでも満足を見出す事は出来る。戦争の間にも“死によって生きる哲学”を持ち、抽象的な祖国といふ言葉、民族といふ言葉に惹かれて自ら或る種の麻酔状態に入って感情の昂奮を覚え自己満足の境に達する一種の宗教心を持つ事の出来るのが人間だ。其なら何故戦争等といふ野蛮な状態を離れて全人類の幸福を求める事が出来ないのか。其所に何故満足を見出さうとしないのか。少数の盲目者か偽善家に引づられてゐるのだ。…二十世紀の今日、科学を無視し、怪し気な宗教に災されて自然を歪められた眼で見る者が果して幾人ある事か。現在の我々に課せられた問題は現代即ち第二のルネッサンスに於て社会科学に災する迷信を一掃する事にありと云はねばならない。国家主義、民族主義の信仰は中世人がキリスト教によるのみ救済されると信じたに全く同じ事なのである。

佐々木八郎『日記IV』1942年1月25日

今日は母と弟と三人で戦勝第一次祝賀会をやる。松屋で *Binding* のいゝのを見つけてから“意志の勝利”を観る。第六回ナチ大会の記録、リーフェンシュタールの処女作ださうだ。喧噪と反復繰返しに退屈する。あんなに国家とか民族とかいふものを中心にして統一される事が出来て幸福さうに見えると、——ドイツといふものに誇りを感じずるのを見ると、国家主義に妥協してしまひたくなる。だが待て、あの様な手段を以て、“全体”の為の労働を神聖視せねばならない事実。白痴の如くに国民を化し、国民にレビューをさせて楽しむ如き為政者、我々はあれを見てどう考へるか。二つながらに人間性に背くもの、歴史に背くものとして、その生命の果てる日は指呼の間にあると云はねばならない。人間大抵の事

に一時の我慢は出来よう。“馬鹿になる”事も出来よう。然し“人間”に背き“歴史”に背くもの、永続する道理がない。

佐々木八郎『日記IV』1942年3月7日

徹底的に戦争の惨禍に苦しむがよい。徹底的に搾取されるがよい。さうすれば人は己れの愚かであった事を知るだらう。軽蔑してみた理性に目ざめるだらう。此れのみが生活の糧だと思ってみた愛国の、忠孝のといふものが中世の遺物であった事を知るだらう。さうして封建制度の改革が領主によってなされなかった如く、次の改革も現在の為政者や資本家によってなされるものではないといふ事も云へよう。…欧米ではやがて経済の困窮から社会制度の改革或ひは新たなエネルギーの獲得が案出されるだらう。何時までも忠孝一本槍で“精神文明”を強調して悲惨な生活をさせるべきではない。売国奴と罵られる人の方が世界について正しい眼を持ってゐるのだ。

佐々木八郎『日記IV』1942年3月22日

・日本主義批判

僕が戦争に行けとなら喜んで出て行かう。其も歴史の一駒だから。日本精神とか何とかを持って死に行けと、僕には其を命ずる事は出来ない。…他人の幸福が同時の世の幸福である様な社会にせねばならない。他人の幸福——例へば利己心が幸福の要素である人の——が世の不幸にならない様に社会を、病源を改める事だ。

佐々木八郎『日記IV』1942年2月11日

決して所謂“日本的世界観”が世界を支配するといふ事のある道理はない。日本では未だ封建時代の道徳が強いだけの事で、数十年の後には現在の日本人の賓斥する“英米的^{〔ママ〕}世界観”を人が持つ様になる。其は人間性の必然なのだ。…真の愛国者は抽象的な国家機構を、社会の一単位としての国家を愛するものではない。国民を、人類を愛するものたるべきである。

佐々木八郎『日記IV』1942年2月26日

現在西欧の唯物的自由主義が没落し、東亜の文化、日本精神が新世界を光被するのだとはよく云はれる事だ。…こゝで考へねばならぬ事は、自由主義とは何、東洋的精神主義とは何といふことである。…要するに“精神”とは肉体的不満足を我慢する為に用ひられるものである。…今日本人が没落しつつありとなす自由主義は決して自由主義其自体ではない。自由主義の一つの表現たる資本主義社会の没落なのである。彼等の自由主義は滅びる事はない。資本主義社会が行詰れば次の社会の構想へ彼等の自由主義的積極性が伸びてゆくであらう。東洋的精神文明が西欧的唯物的自由主義に代るとする説の誤謬は其所にあるのである。…東洋的諦観、無の哲学、精神文明、其れが其のまゝに留る時の結果は手にとる様に明らかだ。我々は斯る諦観による一時的糊塗でなく、歴史的必然を認識して世界史に積極的な一步を印しなくてはならない。

佐々木八郎『日記IV』1942年3月24日